



第 39 号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087 TEL. 0566-41-8522

FAX. 0566-41-7761

日本の山川草木を映す勾玉

名誉村長 梅原 猛

勾玉といえ、日本人ならば誰も八咫鏡、天叢雲剣とともに三種の神器の一つである八咫瓊勾玉を思い起こす。皇位の証として伝わるこのような神器は、当初宮中に祀られていたが、崇神天皇の御世に宮中から出され、後に鏡は伊勢神宮に、剣は熱田神宮に祀られるようになった。現在は、鏡の形代が宮中の賢所に、勾玉は剣の形代とともに御所の「劍璽の間」に安置されている。

三種の神器は単なる置物や飾り物ではない。記紀によれば、皇祖アマテラスオオミカミは孫のニギノミコトにこの三種の神器を授けて、葦原の中つ国すなわち日本に遣わしたという。スサノオノミコトが退治した八岐大蛇の尾から取り出してアマテラスに献上したという天叢雲剣は、後の景行天皇の御世、ヤマトタケルノミコトに授けられ、ヤマトタケルはその剣をもって熊襲や蝦夷を征服し、地方の政府にすぎなかった大和朝廷をほぼ現在の日本国に匹敵する巨大な国家に仕上げた功労者になったといつてよからう。

鏡も、洞窟に潜むまつろわぬ者を照らして退治する武器として使用され得ようが、勾玉は決して武器とは思われない。その勾玉がどうして日本国家の神器の一つになり得たのであろうか。

勾玉は魚の形をしているが、胎児の形にもみえる。それは生命を象徴しているのだから。地球上に現れた最初の巨大動物は魚類であり、魚類が陸に上がって両生類になり、それが爬虫類へと進化し、超巨大動物といえる恐竜が活躍した時代を現出した。

しかし約六六〇〇万年前の巨大隕石の衝突によって恐竜はほぼ絶滅し、恐竜を恐れて細々と生きていた哺乳類がこの世界を支配せざるを得なくなった。わけても、哺乳類の一種である霊長類のなかで直立二足歩行を行うことにより脳を発達させた人間が、あたかも地球の王者のように我が物顔でさばり歩いた。この人間は、他の動物が決してしない自然破壊を行い、同類の大量殺害である戦争を日常茶飯事の如く行った。私は、このような自然破壊と同

類の大量殺害を原理とする文明はやがて滅びざるを得ないと思う。そしてこのような危機を乗り越えるためには、「草木国土悉皆成仏」という思想が人類を支配する原理にならなければならないと信じるものである。

日本の基層文化は縄文文化であり、縄文文化は人類が何十万年と行っていた狩猟採集あるいは漁労採集の文化である。そして周囲を海に囲まれ、サケ・マスの遡上があり、豊かな漁労採集生活が営まれていた日本こそが縄文文化のみごとな花を咲かせたのである。このような文化が、岡本太郎が口をきわめてほめたたえた縄文土器あるいは土偶というすばらしい芸術品を生み出した。今や縄文土器や土偶の芸術性は世界でも高く評価されている。

私は、そのような文化がこの日本に存在することを世界に声高く語らねばならないと思う。それはまた平和への熱烈な叫びでもある。

(月刊「目の眼」二〇一七年九月号より転載)

愛の誕生

久野昭

(国際日本文化研究センター名誉教授、広島大学名誉教授、無我苑顧問)

天地がどのように生まれたのか、神々がどのようにこの世に現われてきたのかを示す一説がある。

「まず、そもそものはじめに生まれたのは、カオス(混沌)である。次に、あの一切のものの永遠の土台である広い胸をした大地が生まれ、また、幅広い道のある地の奥深くに住む冥府が生まれ、また、不死なる神々のうちでも一番美しい神、手足の力をゆるめ、すべての人間の心や意思を征服するエロースが生まれた。」

これは、紀元前八世紀のギリシアの詩人、ヘシオドスの「神統記」の中の一節である。

天地、神々の出現、さらには、愛の神であるエロースが、この世の出現と時を同じく生まれたとされている。愛はこのようにこの世の誕生に深く関係している。

紀元前五世紀から四世紀にかけてのギリシアの喜劇作家、アルストパネスによると、闇に夜が卵を産みつけて、卵が割れて、エロースが光明とともに黄金の羽で背をきらめかせて出てきたとされる。愛が熟し、自ら殻を破り、暗い闇を光に変えたとすれば、神秘的で

はないか。また、一説では、愛が生まれたとき、割れた卵の片方が天に、もう片方が地になったともされ、天地を分離するほどの力をもつていたことになる。

光明である愛と、暗い闇は、想像を超える力を持ち、均衡の上になり立っていたのではないだろうか。私たち人間も、光明と暗い闇を持ち、また、有限と無限、不完全と完全の中間に存在している。

私たちは、完全に知っているものを問うことはない。完全に知られるものは、完全に知られているものでもなく、完全に知られていないものでもない。問いは、中間的な状況で生まれる。「哲学」は問いの性格を持つが、まさに、中間的な状況において提起される。

エロースの神は、智慧と無智の中間に在る。愛は中間的であるから、智慧を求め、美を求め、善を求め、完全を求めようとする。中間的な存在である私たち人間にこそ、愛は最もふさわしい。愛は最も人間的な情熱であり、私たち人間は、愛を通じて自分の実存の根拠を見出そうとする。

【お知らせ】

平成三十年度前期哲学講座

前期哲学講座を開催します。今回のテーマは「江戸の育児書の間観」です。ぜひご参加ください。

● 日にち 六月十六日(土)、二十三日(土)
● 時間 午後二時～午後四時
※全二回

● 講師 梶谷真司氏 (東京大学大学院教授)
● 定員 二十名(先着順)
● 受講料 千円
● 申込み 五月十七日(木) 午前十時から受講料を添えて無我苑瞑想回廊事務室にてお申込みください。

< 講義の概要 >

第1回 6月16日(土)

江戸の育児書の間観 (1)

～子どもはいつ“宝”となったのか？

“子宝”という言葉が示すように、私たちは当然のように子どもはかけがえのない大切な存在だと考えています。けれども近世以前、子どもはきわめて粗末に扱われ、容易に捨てられ、殺されていました。江戸時代になると、子どもは家の“宝”と見なされるようになります。けれどもそれはまだ、子どもが無条件に大切だと考えられたということではありません。では一体いつ、どのようにして子供の命はかけがえのないものになったのでしょうか。本講義では、子どもの命の歴史をたどります。

第2回 6月23日(土)

江戸の育児書の間観 (2)

～母乳育児はどういう意味で“自然”なのか？

“子どもは母乳で育てるのが自然だ”と言われます。江戸時代にもそう言われていますし、歴史の中で繰り返しそのように語られてきました。けれどもここで言う“自然”とはどういう意味でしょうか。私たちは“自然”と言うと何か歴史を超えた不変の真理を表しているように思います。しかし、江戸時代、明治時代、現代では、まったく異なる意味で使われています。本講義では自然の思想について、母乳育児を手掛かりに考えていきます。

【お知らせ】 涛々庵茶会・三曲定期演奏

涛々庵茶会は毎月席主によってそれぞれに創意工夫がなされ、華やかな茶会となっております。また、茶会に華を添える箏、三弦、尺八による三曲の定期演奏も研修道場安吾館にて行っています。

平成三十年度の涛々庵茶会は、毎月第四日曜日に開催します。ただし、十二月は第三日曜日に開催します。料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで（立

平成30年度涛々庵茶会・三曲定期演奏予表			
月 日	涛々庵茶会		三曲演奏 出演団体
	席主	流派	
4月22日	小島 和美(宗美)	裏千家	開催しません
5月27日	杉浦 伸子(宗伸)	裏千家	鈴木祥子社中
6月24日	小笠原芙美(宗文)	久田流	神宮弘美社中
7月22日	鈴木なみ江(宗江)	裏千家	絲音の会
8月26日	神谷美枝子(宗美)	表千家	若草会
9月23日	澤田 教子(宗教)	表千家	鈴木祥子社中
10月28日	市制70周年記念茶会		鈴木祥子、長崎智子、岩間松代
11月25日	藤原知香子(宗知)	裏千家	山本加代子社中
12月16日	小林ミサ子(宗実)	裏千家	絲音の会
平成31年 1月27日	鈴木なみ江(宗江)	裏千家	若草会
2月24日	杉浦 時子(宗時)	宗偏流	鈴木祥子社中
3月24日	碧南文化協会茶道部		絲音の会

礼茶席は十六時までです。三曲の演奏は十時から十五時まで随時観覧無料で行っています。ぜひお越しください。

市制七十周年記念茶会

碧南市は今年、市制施行七十年の節目を迎えます。無我苑では碧南文化協会茶道部のご協力を十月二十八日(日)に開催します。詳しくは、今後村民通信などでお知らせしていきます。

【平成二十九年年度に開催した事業】

長月の会

◆出演◆

陽影月(ひかげつ)

平成二十九年九月十六日、哲学たいけん村無我苑研修道場にて、「長月の会」を開催しました。今回は、三味線デュオの岡野兄弟とピアニスト、徳丸大将からなるユニット、陽影月(ひかげつ)をお迎えして、「地上の星」、「残酷な天使のテーゼ」、「情熱大陸」をはじめとして、多くの曲を演奏していただきました。

当日はあいにく朝から雨が降り続き天候が不安定のため、研修道場での開催となりましたが、力強い三味線演奏と、美しいピアノの音色に感銘を受けました、大迫力の演奏で、皆様心を奪われていました。



新春コンサート

◆出演◆

河西明風氏、平野春海氏

平成三〇年一月六日、哲学たいけん村無我苑研修道場にて、「新春コンサート」を開催しました。今回は、尺八演奏者の河西明風氏と箏演奏者の平野春海氏をお招きしました。尺八と箏の音色が響きわたりました。正月の代表曲の「春の海」や「ハナミズキ」などの曲が演奏されました。

また、会場には去年十二月まで開催した糸かけ曼茶羅教室の作品が並び、華やかな雰囲気でした。新春の無我苑開きにふさわしい、雅やかな素晴らしいコンサートとなりました。



伊藤証信の遺品

大正九年初号の機関誌

『精神運動』

大正五年、宗教新聞『中外日報』の主筆として赴任した証信は、京都に妻あさ子と住んだ。大正八年事情により『中外日報』が廃刊となり、二人は再び上京し、東京神田神保町に住んだ。証信四十三歳あさ子三十八歳の冬であった。その翌年発刊されたのがこの機関誌『精神運動』である。

住まいを「信仰策進会」の本部に

証信は中外日報に、社説の他「信仰問答」一覧を担当した。これらは無我愛の信念を根本とした証信独特のもので、多くの読者に深い感



精神運動 (大正9年1月1日発行)

銘を与えた。

証信は、こうしたものを中心に東京で行われた「信仰座談会」で講話をした。そのときの聴衆の熱心な反応を感じた証信は、思想界が沈滞している今こそ真剣な宗教運動をなすべきであり、自分に課せられた使命がそこにあると強く感じた。

こうして生まれたのが「信仰策進会」であった。たまたま『中外日報』が廃刊になったことで、神田神保町の二階建ての借家に住むことになった。学生や学者の出入りの多いことからこれを「信仰策進会」の本部（精神運動社）にすることにした。さらにあさ子の提案で、一階にミルクホールを開業することになった。男も女もなく誰とも積極的に交わることができる無我愛実践の場と考えたのである。

「精神運動開始記念講演会」の開催と機関誌の発刊

大正九年（一九二〇）一月十二日「精神運動開始記念講演会」を開催した。その講師には、日本の社会主義運動の先駆者阿部磯雄、文明批評で健筆をふるい文化勲章受章者の長谷川如是閑など、そうそうたる人物をそろえた。聴衆は千人を超え、講師の熱弁は深い感銘を与えた。まさにこの頃は、都市化が進む中、大正デモクラシーが吹き荒れていた時代でもあったのだ。その日の会場で配られた『精神運動』第一号（大正九年一月一日付け）の宣言（其の一）には次のように書かれていた。（筆者要約）

- 一、世界を作り替えるには、人間精神の改造が必要で、それは宗教的信念の開発によってなされる。
- 一、社会運動や教育など全ての運動は開発された信念をいきいきとあらわすことで真の意味を持つ。
- 一、労働、資本、智力、体力など全ての資質は、本来公のものであり、尊い宝物である。
- 一、人類は、互いに助け合い、感謝と奉仕の生活を営まないわけにはいかない存在である。

一、宗教や哲学、教育、芸術、政治、実業などの中にある古い形を壊し、それらの中に流れ、動きながら貫き通っている無我愛の精神を奮い起こし、世界改造の大事業に参加することを期待する。

あさ子の婦人解放運動

「信仰策進会」の運動は、全国的に広がり、来訪客も日増しに増え、中には泊まりがけの求道者もあつた。あさ子一人でのミルクホール営業が困難になり、たった二か月で休業することになった。

あさ子は時間的に余裕ができ、時代を走る女史たちとも積極的に交流した。その中には平塚らいてう、与謝野晶子、日向きむ子、神近市子、市川房枝などがいた。この後、あさ子自身も婦人解放運動に強く関わっていった。このように神田の精神運動社は、時代の潮流をいく思想家たちの拠点となり、証信夫婦はまさにその中心人物であったのである。

碧南市史資料調査員

浅井 久夫